筑波大学体育科学系紀要　Bull. Health & Sports Sciences, Univ. of Tsukuba　12:11−17,1989.

教育としての「武道」の問題

——特に学校教育との関連より——

前　林　清　和

A study of "Budo" as the Education

——Especially in terms of school education——

Kiyokazu MAEBAYASHI

In Japanese schools, the term "Kakugi" (combative sports) is being replaced by "Budo" in physical education teaching.

The reason for this change is to emphasize Budo as a kind of moral education in order to solve moral weakness in modern society. However, our study questions this idea. The purposes of this study are to clarify the concept of Rei (the thought of coustesy) and the ethics of Budo.

Our study can be summarized as follows;

1　There are two meanings attached to ethics. One is a relative social norm, the other is a transendental internal moral standard. The former is related to customs and the latter is related religious commandments. In the Edo era, the latter definition was applied to Budo ethics whilst the former applied to Bushido ethics as understood by the Bushi class.

2　The end of the Edo era meant the end of Bushi as a class and the consequent confusion of Budo concepts with those of Bushido. However, we underline the fact that these concepts are not the same.

3　"Rei" in Budo not only means social order but also covers ritual and is one of the ways of understanding the inseparable unity of mind and body.

Our study concludes that there is no satisfactory basis for changing Kakugi to Budo for physical education within our shools.

Key words："Kakugi", "Budo", "Rei", ethics, education

Ⅰ．はじめに

昭和62年12月，教育課程審議会から「幼稚園，小学校，中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」[1)]の答申が出され，近々学校体育における「格技」という名称が，「武道」[注1)]という言葉に変更されることになった。

このことについては，各界で様々な議論がなされているが[注2)]，名称変更が現実のものとなる現在，その賛否論より，「武道」を前提とした内容の検討が必要であろう。

一般的に言って武道の特質，本質といったものは観念的に考えられやすく，安易に「伝統的」とか「これが正しい」という主張や発言がみられるが，往々にして的外れ，あるいは独断的な内容のものが多い。

そこで，筆者はこの問題について思想史的な立場から武道を捉えることによって，これからの学校教育における武道のあり方を考えて行く上での

基本的立場を得る手立てとしたい。

II．武道に求められているもの

まず，本論を進めて行く上で，その内容が現状の問題と即応したものにするために，国，あるいは学校教育で「武道」を推進している人々が，武道をどのように考え，また何を求めているのかを明らかにしておこう。

前記の答申の中の「教育課程の基準の改善の方法」の4番目に，「国際理解を深め，我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視すること」[2]とあり，それを受けて体育・保健体育の項で「現行の『格技』の領域については，名称を『武道』に改め，我が国固有の文化としての特性を生かした指導ができるようにする。」[3]と述べられている。ここで問題になるのは，武道の「我が国固有の文化としての特性」とはいかなるものか，ということである。このことについては答申には具体的な内容について何の記述もないが，昭和62年1月・2月『月刊武道』に掲載されている「日本武道を語る」に彼らが考える武道の「特性」あるいは武道に求めるものを示唆する次のような発言がある。

(1) ぼくは，だんだん武道がスポーツ化してしまって，それでおっしゃる道，礼というものを踏み外していってしまったんでは，これ日本の国技にとって，さびしいなという感じがしましてね。ですから，私は体育局長なんかに，やっぱり格技を武道にするとならば，武道の「道」ということを学校教育の中に，キチッと位置づけなきゃいかんぞということを言っているんです[4]。

(2) これ学校教育におきましても，武道に名前を変える時のいきさつも実はありまして，その時に，私たち文部省が，なぜ武道と「道」にするかと言えば，今，社会人に求められているマナー，しつけ，こういうものに一番最適のスポーツだということと。そういう逆に今，学校教育でそういうけじめを教えるのは，ほかの学科ではできない[5]。

(3) これはやっぱり本来日本では柔道，剣道，みんなそれぞれ礼に始まって礼に終わるという一種の「道」ですな[6]。

つまり，彼らが武道の特性と捉えるもの，武道に求めるものは，森川氏も「またしても『武道』による『徳目主義』＝『道徳教育』への期待ということであろう。」[7]と述べているように道徳・倫理的な内容であり，その具体的な表れとしての「礼」ということになる。

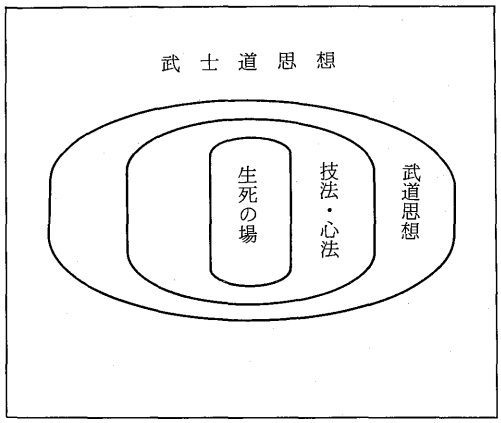

図1．近世「武道」の構造

このような武道に対する期待は特殊なものでは決してなく，多くの武道家，武道推進派の人々，あるいは子供を剣道教室などへ通わせる親たちが持っている感情である。

それでは，今みてきた鼎談の中で述べられている武道におけるマナー・躾・道といった「倫理」・「道徳」の問題と「礼」についてその特性を思想史的に吟味してみよう。

III．武道における「倫理」「道徳」について

なぜ，他のスポーツ以上に武道が倫理・道徳さらには道といった精神的なものと関係付けされて考えられるのか，あるいはその実践による人間形成が期待されるのであろうか。

このことについて検討する前に，われわれは武道そのものの構造について考えなければならない。

武道は，近世前期にはすでに単なる技芸ではなく高橋氏が言うように「道得を目的として，広く人間形成と社会教化の役割を担っていた」[8]のである。つまり，武道は文化として独自の世界を形成していた。その構造を簡単に表せば，上記のようになろう。

この図1を説明すれば，まず武の本質は，己を他から守る，あるいは己の所属する種族を守るために他と戦うという行為である。これは生死の問

題と直接的に係わっており，乱世を過ぎ江戸時代に入っても，このことを前提として武道の修行がなされた。つぎに，この実践の場においてとりあえずは自己を守る，あるいは勝ちを得るための手段としての技法が実践を通して研究・工夫された。また，その技を有効に発現させるため，またそれを普遍的なものにするために，その時の心の持ち方，他との駆け引きといった心理の問題が重視され心法として追求された。さらに，これら技法・心法は，その相対性の克服により絶対的境地として確立することが求められた。そして，これらの実践体験を元にその技法や心法をいかに体得し，高度化・洗練化していくかということを追求する態度が，神道・仏教（禅・密教）・道教などの宗教と繋がり，心身観・修行観を中核とした武道思想が形成されたのである。

ただし，江戸時代も中期頃になり政情が安定してくると，武士たちの武道に対する取り組みというものは，ほとんどが武士の嗜みとしての技芸となり，ある意味においては現在と余り変わらない状況であった。しかし，平和な時代こそ武道は高度化・洗練化されるのであって，武道を極めるために一生をかけた武芸者も勿論存在し，彼らによって武道の技法・心法が追求され体系づけられて行った。

また，武道は原則的に武士が修練するものであり，必然的にこの武道思想の土台，あるいは背景には儒教思想を骨格とした武士階級の行動規範，すなわち武士道思想がある。これらの諸要素はお互いに影響しあいながら武道という身体運動文化として形成されていったものと考えられる。

ところで，このように体系づけられた近世武道において，人間形成あるいはその根拠となるべき倫理・道徳などがどのように捉えられるのかを考えてみようと思うが，その前に倫理・道徳といった言葉それ自体の意味内容を確認しておこう。

倫理・道徳を考える場合，大きくわけて2つの観点がある[9]。まず，社会現象として見る立場であり，この場合倫理・道徳はある時代ある場所の集団によって承認される行為の準則の全体であり，習俗と密接な関係をもち時代とともに変遷し，場所によって異なる。この捉え方は，われわれの日常的な生活規範として一般的に理解されているものであり，人間がその社会の一員として生きて行く上で欠かすことのできない原理である（便宜上，社会的倫理観と呼ぶ）。一方，個人の意識や意志に働きかける内的規範としての立場からみれば，倫理・道徳は無条件に普遍的に妥当であるとみなされる行為の準則の全体と考えられる。これは社会との関連ではなく，むしろ宗教的あるいは求道的な戒律と密接な関係を持つ（便宜上，内的倫理観と呼ぶ）。

したがって，前者の立場では，人間形成とは，ある社会の習俗・規範にマッチした具体的人間像に基づいたものであり，いかに社会の中で正しく生きるか，良く生きるかということが問題となる。言い換えれば，この場合の人間形成とは人間の外界に対する適応とみることができ，外なる秩序に己を組込んでいく過程と言えよう。それに対して，後者から見た場合，人間形成とはその戒律的な規範を遂行することによって，己を絶対的な境地，時代・地域を超越した真理を直感し体得することを意味し，いわゆる「悟り」といわれる心的状態を目指すものである。これは，人間の内界にむかっての追求であり，内なる秩序の構築あるいは再構築の作業である。

このようにみてくると，近世の武道は武士道との関連から倫理・道徳の問題を少なくとも構造的にはうまくカバーしあっていたといってよい。要するに先ほどの図式で説明すると武道思想のバックボーンとして密接な関係にあった武士道思想（儒教思想）が社会的倫理観を，武道思想が内的倫理観を担っていたのである。

よって，武道を修行する武士たち（原則的に全ての武士は少なくとも嗜みとしては武道の修行をしていた）は，社会構造的には武士道という社会的倫理観によってその行動規範が明確に示されており，その意味においてある程度の人間形成は保証されていたと言えよう。一方，一部の真の武道を極めようとする者は，その実践を通しての技法・心法の追求によって，いわゆる「悟り」といわれるような境地，すなわち自己内面的な意味での人間形成を目指したのである。そして，このような態度，あるいは実践過程が修行であり，武道ではその結果もさることながらこの修行自体に大きな価値を認めていたといえよう。

このように，近世における武技を中核とした武道思想そのものは，極めて自己の内面的追求にその精神性が向けられており，その究極的境地である「悟り」というような心的状態は，それが社会

的倫理観に即しているかどうかという問題とは別の次元のものであった。

また，武道は人の生死を意のままにする能力を身につけるため，ある程度以上の倫理観をそなえた者がその修行の対象とならなければいけないのであり，また流派を存続させて行くためにも秘密をもらしたり流派を裏切ったりするような者には教えられないという事情があった。したがって，本来武道では本人の自発的な決意を前提として，しかも指導者がその人間性（社会的倫理観はもちろん内的倫理観において）を見極めた上で，少なくともその素養を認めた者にしか，その流の極意といったものは教えなかったのであり，一種のエリート集団的な性格のものであった。このような態度・教習形態は，武士が全て武道を修練するという状況から殆ど建前論として扱われ，形式的なものでしかなかったが，一部の武道を深く追求していた人々，いわゆる武道専門家の間では実際問題として重視され厳格に守られていた。

ところで，江戸幕府が滅び，それに伴い武士階級がなくなり武道の外辺部にあった武士道思想の実体が失われると，それまでの武道の構造も崩壊した。しかし，武士の台頭以来，日本人の心の中に長年にわたり根差してきた武士道思想（儒教思想）は，日本人の心に深く根付き社会的倫理観として習慣化しており，その制度の消滅と共に失われるものではなかった。明治維新以後もなお，武士道思想は，天皇を中心とする近代士道として「軍人勅論」や「教育勅語」などによってその性格が明確にされ，より広く国民の中に浸透していった[10]。戦後，近代士道は否定され民主主義に基づく国作りが行われてきたが，武士道思想あるいは儒教思想は現在に至るまで多かれ少なかれ日本人の心の底に流れ続けており，日本の習俗・風習さらには社会的倫理観の根底をなしているといえよう。

この傾向は武道に端的に表れており，明治以降，本来綿密な関連性を持ちながらも別々のものであった武道思想と武士道思想が一体のものとして，いや混同されて認識されるようになった[注3]。すなわち，武道思想の中に武士道思想が入り込み，この武士道思想があたかも武道本来のしかも中核的な内容であるというような捉え方がされるようになったのである。言い換えれば，自己の内面的な確立を目指す武道思想に社会的な徳育論が入り込んできたのであり，武道を行えば社会規範としての倫理観が身に付くといった考えが生まれてきたといえよう。

そして，これらの考え方が次第にナショナリズム・軍国主義と結び付き第2時世界大戦の時に国民の意志の高揚の手段として利用されたのである。戦後，その反省と共に武道はスポーツとして復活したのであるが，現在もなお，人々の心の根底には武士道的なエートスがあり，それを武道とオーバーラップして認識する傾向がある。

Ⅳ．武道における「礼」について

Ⅱ章で述べたように，武道に対して具体的実践規範として期待されるものに「礼」がある。

つまり，現在の家庭，学校，社会において乱れているとされる，親・先生・目上の人・友人などに対する礼，つまり，躾・マナーとしての礼節を回復するために，武道教育が最も有効な手段であるというのである。

また，武道の側，例えば武道の指導者はしばしば武道の礼の特徴的意味を「相手を尊重するため」のものとして説明し，学習指導要領[注4]でも同じような内容の意味付けがなされている。

しかし，このような「礼」の捉え方は，かならずしも武道の礼として的を得たものではない。したがって，この章ではこのあたりのことについて検討してみよう。

ところで，ここであつかう「礼」とはできるだけ広い意味において，つまり礼儀作法全般を含めて捉えることにする。

「礼」思想は，中国にその起源があり，元々の意味は様々な説があるが，神・崇高なる者への畏敬の念を表すものとして，和平の感情を表現するものとして，あるいは上下関係の秩序を保つためのものとして生じたのであり，孔子，孟子，荀子などの儒家によって思想として確立された。また，武との関係もそのころから見られ，『礼記』射義には弓射における礼法についての記述がある。

このような「礼」思想は早くから我が国に入ってきており，大和朝廷の頃から宮廷の儀礼として取り入れられ，弓射も朝廷の行事としておこなわれて「大射祿法」[注5]が定められるほど弓射儀礼が重んじられていた。そして，中世に入り武士が台頭してくると，礼も儀式的なものから「兵の道」として武士のあるべき姿を表すための実践的規範として重んぜられるようになる。また，室町に入

ると小笠原により故実としての武家礼法が定められることになる。

以上，近世以前の「礼」の流れを簡単にみてきたが，次に武が一つの身体運動文化として確立した近世において武道の礼がどのようなものであったのかということを検討してみることにする。

武道における礼はその意味内容から考えて3つに分けて捉えることができよう。つまりいわゆる武士道的なもの，修行的なもの，儀式的なものである。

それではまず，武士道的な礼について述べてみる。

これは，儒教的な礼と言い換えられるものであり，武士のあるべき姿を表すための躾・マナーとしての礼思想である。江戸時代に入り徳川が政権を握ると，その政策として儒学思想，特に朱子学を中心とした思想統制が行われ，それにそって武士教育がなされた。儒学思想では，「礼」を「自他の峻別の上に立ちながら，しかもなお，自他の和諧を実現していく徳」[11]（論語）として捉えてきたが，当時日本的な解釈によって独自の展開がさかんになされた。例えば，林羅山は，人間社会の上下関係を天地の上下関係つまり宇宙の理に求め，人の尊卑の差を分け，人の心を治めるために礼儀が必要であるとした。また，山鹿素行は，武的人間としての内面的な確立は外面的な礼の形としての威儀の正しさと相即するものと考え，礼儀正しい閑かに強みのある人間像を求めたのである。

このような武士道的礼が，武道における礼と密接な関係，武道を修行する者の前提としての基本的生活習慣になっていたことは疑問の余地のないところである。なぜならば，前にも述べたが，武道は武士階級のみが行った（幕末になり崩れるが）身体運動文化であり，したがって武道思想と武士道思想はこの「礼」を始め，武道の存在意義についての定義など様々なところで入れ子構造の関係にあるといってよい。

つぎに，修行的な礼について考えてみよう。

これは，仏教，特に禅あるいは密教における修行を示す。禅の修行では，「三学」という言葉があるが，これは仏教を学ぶ場合の基本的な順序を示し戒・定・慧から成っている。まず，「戒」は日常生活における実践的規範であり，しかも自律的決意，つまり「我〜せず」という態度の元に行う規範である。例えば，道元の定めた「永平清規」[12]には洗面や食事など生活の細部にまでわたる規範が定められている。つぎに，「定」は，坐禅つまり瞑想を意味するのであるが，これも座り方，手の置き方，姿勢，呼吸など細かくその形が定められている。なお，「慧」はいわゆる悟りの状態を意味する。また，密教でも『摩訶止観』[13]に記されているように「常坐三昧」「常行三昧」などの瞑想修行を行う際の詳細な礼儀作法が定められている。

このように仏教では，身体を律することにより精神を鍛えて行こうという態度をとる。このことについて湯浅氏は，

> このように自己を「形」に入れてゆくということは，規則に定められた「形」に従って身体を訓練し，それによって自己の心のあり方を正してゆくことを意味する。言いかえれば，心が身体を支配するのではなく，逆に身体のあり方が心のあり方を支配するという立場に立つのが修行の出発点である[14]。

と述べている。

このような自律的決意によって形に自己をはめて行くことにより精神を高めようとする態度は，武道修行に多大なる影響をあたえたものと思われ，またこのような態度は武道の修練自体に本質的に内在していたのではないだろうか。つまり，組太刀の稽古における礼儀・作法はもちろん，組太刀それ自体が己を形にはめ込んで行こうとする態度を取るのであり，この形から入るという考えは礼に関してだけではなく武道内容全般に共通しており（もちろん日本文化全てに及ぶのであるが），武道の基本的態度といえるのである。

最後に，儀式的な意味においての礼があげられる。

これは，神道の影響が強いと思われるが，礼の最も原初的意味である神への畏敬の念を表し自分を清め，神と出合うための手順としての礼である。つまり，俗から聖への移行，俗世間から神聖なる場所・時間へ自分を誘うための手続きとしての儀礼である。

このような要素は，弓や相撲などの朝廷儀式や年中行事として行われていたものをはじめ，剣術などでも道場を神聖なものと受け止める態度に反映されているといえよう[注6]。また武芸が単なる技芸から修行的意味合いをもつようになるにしたがい，前記の修行的な要素ともあいまって己を修行という非日常的な特殊な時間空間に導く方法とし

て，あるいはそれ自体が修行の一貫として行われたものと考えられる。

このようにみてくると，現在一般的に武道に求められるマナー・躾としての礼は近世の武道における武士道（儒教）思想との関連から捉えられる礼であり，武道特有のものではなく，近世における武士の生活規範としての礼である。また，前章でも述べているように武道を修行する武士たちが武道を行うことによって，あるいは行うために身につけたものではなく，いわば武士としての当り前の基本的な生活様式・規範であったのである。

そして，このような礼は何も武道に限らず伝統的日本文化として現在まで受け継がれ日本の生活習慣，モラルとして日本の社会を秩序だてている道徳的規範といえよう。これがことさらに武道との関連よりとりざたされるようになったのは，やはり前章でも見てきたように武士階級がなくなった明治以降，特に昭和初期頃から敗戦までの間，その傾向が強まったものと考えられる。

武士道（儒教）的礼は武道的礼にも勿論含まれるが，それは日本社会全般に流れるエートス的な存在であり，スポーツなどの他の運動文化に比して武道そのものに特性として備わっている「礼」思想は，むしろ修行的な意味，儀式的な意味に見いだすことができよう。

V．おわりに

現在，学校教育において「武道」を推進しようとする人々が武道に期待している倫理・道徳の内容や礼の内容は，主に社会における人間の生き方，行動の仕方といった社会規範としての側面であり，近世の武道の構造から見ると武道そのものの要素ではなく，それを取り巻く武士道思想の内容である。しかし，このように現在の武道は武士道的な内容をも含んで捉えられる場合が多い。そして，武道思想と武士道思想が混在するようになって，すでに百年以上がたっているが，その間武道が賛否両論どちらにしろ問題にされる個所は殆ど全てこの武士道的社会規範に関するものである。このことは，武士道的な倫理観が武道思想の中に観念的に混同されているだけで構造的に組み込まれていない，秩序立てられていないことを意味する。つまり，武道の構造から見た場合，武道思想を構築している最も武道的な技法・心法と武士道思想が有機的につながっていないということである。元々武道の修行のように自己の心身の内面的追求を目指す行為，つまり内的倫理観に基づく実践と社会的倫理観による日常的実践とは次元の違う問題である。日本における社会的倫理観は，良くも悪くも確かに武士道的な傾向があるが，それは習俗といったいわば緩やかなものであり，それを極端な形で武道と混同することは避けなければならない。武士階級の消滅以来，今なお武士文化として実質的に現在まで続いている武道思想に武士道的なエートスを投影する感情はよく分かるが，そのことを公教育に持ち込むことは誤りであろう。このことに気付かなければ，学校教育における「武道」を推進してきた人々が，武道に求めようとしている教育的意義はその有効性を発揮しないまま今までの過ちを繰り返すだけのものになると考える。

社会規範としての倫理・道徳の問題は，あくまで学校教育，家庭教育など全ての教育において行われるべきであり，武道がその全責任を負わされるべきではなく，また負うべきでもないし，何より武道という限定された種目に，倫理・道徳といった人間の生活全般にわたる問題を押しつけても実際の教育的効果は殆ど認められないといえよう。

つぎに，「礼」についても現在学校や社会で求められている躾・マナーとしての「礼」は何も武道特有のものではなく，武士道思想（儒教思想）を基調にした意味内容のものであり，一般的に日本の生活の中で習慣化されてきたものである。それが乱れてきたからといって武道にその解決策を求めるのは問題であり，これもやはり全ての教育において根気よく指導し習慣化させて行くべきものであろう。また，学習指導要領にみられ武道の指導者もよく述べる「相手を尊重する態度」としての礼は，現代社会において非常に大切な礼の意味の一側面であるが，これはまさにスポーツマンシップとしての礼であり，少なくとも武道特有の礼ではない。武道特有の礼としては，III章で述べた修行的な礼・儀式的な礼の意味があげられよう。ただ，畏敬の念を表すための礼，儒教で説かれた相手と和するための礼といった最も本来的な礼の意味を実感するためには武道の修行は有効的な手段であろう。（ただし，ここでいう修行とは正に武道を極めようと専門的に修練することであり，近世においても一部の者，まして現代においてはごく限られた者にしかあてはまらないであろうが。）

しかし，このような礼の感情は，師弟同行という関係の中で自然に湧いてくる師に対する尊敬の念，また相手と対峙した中での自己の自覚とそれを越えた深層意識での自他の融和の実感という極めて特殊な体験に基づくものである。よって，これらのことは個人の問題に帰するものであり，他からそれを押しつけたり指導したりして理解させるものではなく，またそうされて理解できるものではない。

以上，武道における精神性について内容を限定して思想史的に大まかにみてきたが，最後に筆者が感じたこと述べて終わりにしたい。

教材としての武道特有の価値は，伝統的な日本的身体運動文化ということであり，具体的には身体運動に即した技術観・修行観・身体観などに求められ，その精神性についてもこれらの中に見いだされる自己内面的な問題である。したがって，「武道」をいわゆる徳育体育論として捉えることは，武道そのものの構造・特質からみて無理があるように思われる。

注

注１）武道という概念は非常にあいまいで様々な捉え方があるが，本論文では便宜上，「武道」とした時は今回改正される学校教育における「格技」を意味する。また単に武道と表した場合は，近世における武芸・武術をも含めた幅広い意味で扱う。

注２）「格技」から「武道」についての研究として以下のようなものがある。

＊『体育科教育』「特集　武道と学校体育」　第35巻７号の諸論文

＊志々田文明氏の「武道とスポーツの異同について―武道の特性の考察を通して―」『日本武道学研究』島津書房　1988　を初めとする一連の論文

＊阿部忍氏の「学校体育と武道」『武道学研究』第20巻第２号　1987　等

注３）杉江氏は，山岡鉄舟の『武士道』の内容の検討より，江戸から明治期における武道と武士道の関係の変化について「以後，武道を学習すれば，すなわち武士的徳操が涵養できるかのごとき論議がみられるが，鉄舟においては，剣術における修行論・心法論が直接武士道倫理と結び付くものとは考えられていなかったと理解すべきであろう。」と述べている。
（杉江正敏「伝統的文化性についての検討　その３　明治期における剣道の教育論的展開と無刀流の理念的影響について」『剣道時代』　pp. 68～73参照　1988

注４）高等学校の学習指導要領の「格技」の態度の項に「互いに相手の身体を攻め合う運動であるから，常に礼儀正しく相手を尊重して練習や試合ができるようにする。」とある。
文部省　『高等学校学習指導要領解説保健体育編　体育編』　pp. 38～39　一橋出版株式会社　1979

注５）慶雲３年（706年）に定められた。

注６）武道は近世以前から神道と深い関係にあるが，ここでの意味は道場と神棚との関係を指すものではない。中村氏が述べているように，道場における神棚は明治末期から大正・昭和初期にかけて一般化したものであり，少なくとも武道の伝統的な風習ではない。（中村民雄　「道場―その構造と神棚について」『剣道時代』164号　pp. 94～100参照　1986）

引用文献及び参考文献

１）『文部時報』　第1333号　1988

２）同前　第1333号　p. 45

３）同前　第1333号　p. 72

４）『月刊武道』　242号　p. 35　1987

５）『月刊武道』　243号　p. 40　1987

６）前掲書　(4)　p. 34

７）森川貞夫　「今，なぜ『武道』か」　『体育科教育』　第35巻７号　p. 29　1987

８）高橋進　「『学』としての武道の日本的性格について」『武道学研究』　第20巻第２号　p. viii　1987

９）下中邦彦　『哲学事典』参照　平凡社　1985

10）今村嘉雄　「武道のこころ」『日本の武道』　pp. 130～134　参照　講談社　1983

11）高橋進　『人倫の理法』　p. 222　大明堂　1981

12）篠原壽雄　『永平大清規』　参照　大東出版社　1980

13）関口真大　『摩訶止観』上・下　参照　岩波書店　1983

14）湯浅泰雄　『身体―東洋的身心論の試み―』　p. 151　創文社　1982